

## Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad 冒頭部分について

— ŚB-Mādhy. X 6,4-5 ~ BĀU-Kāṇva I 1-2 —

林 能 輝

0. Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad (BĀU) は、白 Yajurveda 学派のブラーフマナである Śatapatha-Brāhmaṇa (ŚB) の末尾に編集されている。同書には、Mādhyandina 派 (M 派) と Kāṇva 派 (K 派) との二伝承があり (ŚBM, ŚBK), BĀU は M 派では、ここで扱う二つの章を除き ŚBM XIV 巻に (BĀUM), K 派では ŚBK XVI 巻に (BĀUK) それぞれ含まれている。BĀUM と BĀUK とを比較した際、最も大きな差異は、BĀUK の冒頭の二章が、M 派では ŚBM X 巻「Agnirahasya (Agnicayana 祭の秘儀)」の末尾に位置していることである。この事は従来気付かれてはいたが、その意義については殆ど省みられなかったように思われる。本稿では、これら二章が本来「Agnirahasya」に含まれることを指摘し、この視点に立つことによってこれら二章が整合性をもって理解できることを示す。

## 1. ŚBM X 6,4-5 ~ BĀUK I 1-2

1-1. ŚBM X 6,4 ~ BĀUK I 1 (以下「第1章」) は、Aśvamedha 祭において犠牲とされる馬を主題とし、それを太陽と等置することを主内容とする<sup>1)</sup>。本章は、黒 Yajurveda 学派 Taittiriya-Saṃhitā (TS) VII 5,25<sup>p</sup> (Aśvamedha 祭の解釈) とその構成・内容において著しい一致を見せ、本章が TS を基として作成されたことは明らかである<sup>2)</sup>。ただし、TS では冒頭で「祭式に適した馬の頭を知る者は、頭を持ち、祭式に適した者となるのだ」<sup>3)</sup> と述べ、Aśvamedha 祭執行に際しての、犠牲とされる馬の知識に基づく祭式の効果を主題とするのに対し、第1章はこの一節を欠くと共に、馬と太陽との等置をより強調した叙述になっている。

1-2. ŚBM X 6,5 ~ BĀUK I 2 (以下「第2章」) は、「死 (mṛtyú-)」が太初において世界を創造した後、死に陥りかけるが、馬を犠牲にすることにより死を免れるという物語形式で構成され、Aśvamedha 祭による再死 (punarmṛtyú-) の克服を主題とする。本章は Aśvamedha 祭、及びその一部を構成する Agnicayana 祭の実際の次第に沿った叙述となっており<sup>4)</sup>、その際、Agnicayana をめぐる神学的議論が、全体の再死克服についての議論の骨子となっている。ŚBM X 6,5 ~ BĀUK I 2 : 1 nāivēhā

*kīm canāgra āsit. / mṛtyūnaivēdām āvṛtam āsīd aśanāyāyāśanāyā hi mṛtyūs. tām māno 'kurutātmamvī syām iti. so 'rcann acarat. tāsyārcata āpo 'jāyantārcate vai me kām abhūd iti. tād evārkyāsyārkatvām. kām ha vā asmai bhavati yā evām etād arkyāsyārkatvām veda.* 「太初に、ここ（地上）には何も存在していなかった。他ならぬ死によって、これ（地上）は覆われていた、[つまり] 飢えによって。飢えは死であるから。そこで[死は] 思考器官を（自らのために）作った、「胴体を持つ者で私はありたい」と[考えて]、彼（死）は朗誦し（*ārcan*）続けた／朗誦しつつ歩き回った。朗誦していると彼に、水達が生まれた。「朗誦していると私に、幸福（*kām*）が生じた」というこのことが、*arkya* が *arka* である所以である。もし人がこのように、この *arkya* が *arka* である所以を知っているならば、幸福がこの人に生じるのだ。」2 *āpo vā arkāḥ. / tād yād apām śāra āsit tāt sāmahanayata. sā pṛthivy ābhavat. tāsyām āśrāmyat. tāsyā śrāntāsyā taptāsyā tējo rāso nīravartatāgniḥ.* 「水達は *arka*（火壇）なのだ。その際、水達の *śāras*（熱した牛乳の表面に出来る膜）であったもの、それは固められた。それ（*śāras*）は大地となった。そこ（大地）において[死は] 努め励んだ。努め励み、熱を発した彼の光熱力、精髓が、火として現れ出た。」3 *sā tredhātmanam vyākuruta./ ādityām tṛtīyam. vāyūm tṛtīyam. sā eṣa prāṇās tredhāvīhitās. tāsyā prañī dik śiro. 'sāu cāsāu cermāv. āthāsya prañī dik pūccham. asāu cāsāu ca sakthyāu. dākṣiṇā cōdīci ca pārśve. dyāuṣ pṛsthām. antārikṣam udāram. iyām īrah. sā eṣo 'psu prātiṣṭhito. yātra kvā cāiti tād eva prātiṣṭhaty evām vidvān.* 「彼（死）は自身を三様に作り変えた、[自身の] 三分の一を太陽に、[自身の] 三分の一を風に。そこで氣息はこのようなものとして（*eṣa*：現にそうであるように）三様に分け置かれている。東の方位は彼の頭である。あれ（東北）とあれ（東南）とは両前脚である。次に、西の方位はこのものの尾である。あれ（西北）とあれ（西南）とは両（後）腿である。南と北の[方位]とは両脇腹である。天は背である。中空は腹である。これ（大地）は胸である。そこで彼はこのようなものとして水に安立した<sup>5)</sup>。人がどこに行くとしても、このように知っている者は、まさにそこに安立する。」(中略) 7 *so 'kāmayata / mēdhyam ma idām syād. ātmanvy ānēna syām iti. tātō 'śvaḥ sāmabhavad. yād āśvat tām mēdhyam abhūd iti. tād evāśvamedhāsyāśvamedhatvām. eṣa ha vā āśvamedhām veda yā enam evām veda.* 「彼（死）は欲した：「私のこれ（思考器官）が祭式に適したものとなってほしい。これによって（これを用いて）、胴体を持つ者で私はありたい」と、それ（思考器官）から馬が生じた。「膨らんだ（*āśvat*）もの、それが祭式に適したもの（*mēdhyā*-）となった」という、そのことこそが *āśvamedha* が *āśvamedha* である所以である。それをこのように知っている者、この者はつまり *āśvamedha* を知っているのだ。」8 (BĀUK 7 後半) *tām ānavarudhyevāmanyata. / tām saṃvatsarāsyā parāstād ātmāna ālabhata. paśūn devātābhyaḥ prātyauhat. tasmāt sarvadēvatyam prōkṣitam prājāpatyām ālabhanta. eṣa vā āśvamedhō yā eṣa tāpati. tāsyā saṃvatsarā āt-*

*māyām agnir arkās. tāsyemé lokā ātmānas. tāv etāv arkāśvamedhāu. sò púnar ékaivā devātā bhavati. mṛtyūr evāpa punarmṛtyūm jayati. nāinam mṛtyūr āpnoti, mṛtyūr asyātmā bhavati, sārvaṁ āyur ety. etāśāṁ devātānām éko bhavati, yá evāṁ veda.* 「それ(馬)を[まだ]確保していないと[死は]思った。[死は]一年間の後に、自らの為にそれを犠牲にした。[死は]動物達を神格達の為に押し返した(譲り渡した)。それ故[人々は]、全ての神格に捧げられ、ブラジャーパティに捧げられる、(犠牲獣として水を)かけられた[馬]を犠牲にする。この熱を発しているもの(太陽)が、この *āsvamedha* なのだ。一年間がその胴体(*ātmān-*)である。この(地上の)祭火が *arka* である。これらの諸世界がそれ(祭火)の胴体達である。その両者が、この(例の) *arka* と *āsvamedha* とである。その[両者]が (*sā*)<sup>6)</sup>、また、ただ一つの神格として再び生じる。死そのものが再死を克服する。もし人がこのように知っているならば、当の者に死は到達しない、死が彼のアートマンとなる、[彼は]寿命を全うする、[彼は]これらの神格達の一人となる」。本章の解釈には、*arkā-*の語が意味するものと、再死克服の根拠付けとなる、祭式の神学的意義付けの二点が重要である。これらは、*Agnirahasya* の他の章に見られる *Agnicayana* 祭の解釈と共通する点を多く有し、またそれによってのみ整合的な理解が得られる。

1-2-1. *arkā-* : *Agnicayana* 祭の火壇 本章における *arkā-* は従来、様々に解釈されてきた<sup>7)</sup>。*arkā-* は、*Rgveda* においては、祭式において旋律(*sāman-*)を伴って歌われる「歌詞」を意味していたが、この語義は後に失われ、後代の黒 *Yajurveda* 学派のブラーフマナにおいては、もっぱら *Agnicayana* 祭において構築される火壇を指して用いられる。この用法は *ŚB* においては、*Agnirahasya* の巻においてのみ特徴的に見られ、本章においてもこの意味で用いられている<sup>8)</sup>。

1-2-2. 第2章における祭式解釈 これまで、「死」は *Prajāpati* を象徴するものと解釈されてきた<sup>9)</sup>。しかし、本章の内容を検討した場合、「死」は、太陽を(→2)、また一方で火壇の下に埋められる死後の祭主を象徴する黄金製の人形(*puruṣa-*)を暗示していると解釈するのが妥当である。本章末尾の「死が彼のアートマンとなる」との一節は、この人形が、祭主の来世における自己(アートマン)に仮託されていることを意味すると考えられる(→3)。第2章では、火壇(*arkā-*によって暗示)の設置とそれに続く馬の犠牲という一連の祭式行為を、*arka* を祭火と、*āsvamedha* (馬)<sup>10)</sup>を太陽と等置することによって、それらが同一の神格、すなわち太陽として再び生じるという祭式解釈を行っている。すなわち、先に火壇(*arka*)の下に埋められていた死後の祭主を象徴する人形は、太陽と同一視される馬(*āsvamedha*)の献供により、天界(太陽)に至ったものとみなされ、死後、祭主が天

界に生じ不死を得ることが保証されている。本章は *Aśvamedha* 祭を主題としつつ、その中に含まれる *Agnicayana* 祭の解釈を核として、死後の不死の獲得を根拠付けているのである。

2. 太陽をめぐる思弁 太陽は、死と同一視ないし等置されることがある (cf. 3. 太陽中の *puruṣa* と「死」の等置) : ŚBM II 3,3,7 (*Agnihotra*) *tād vā eṣa mṛtyūḥ / yā eṣa tāpati. tād yād eṣa eva mṛtyūs tāsmād yā etāsmād arvācyah prajāś tā mriyanté. 'iṥa yāḥ pārācyans té devās. tāsmād u té 'mṛtās...* 「その場合、この熱を発している者 (太陽)、この者こそが死なのだ。それ故、他ならぬこの死であるもの、そういうこの者よりも、こちら側にいる生き物達、彼らは死ぬ。次に、[死 (太陽) よりも] 向こう側にいる [生き物達]、彼らは神々である。それ故、また、彼らは不死である。(後略)」 ŚBM X 5,1,4 (*Agnirahasya*) *sā yā sā vāḡ asāu sā ādityāḥ. / sā eṣa mṛtyūs tād yād kiṃ cārvācñam ādityāḥ sārvaṃ tān mṛtyūnāptām. sā yō hainam āto 'rvācñam cinutē mṛtyūnā hainam sā āptām cinute. mṛtyāve ha sā ātmānam āpidadhāty. ātha enam āta ūrdhvam cinutē sā punarmṛtyūm āpajayati. vidyāyā ha vā asya iṣo 'ta ūrdhvam citō bhavati.* 「その、言葉 (言語機能) であるもの、それはあの (天の) 太陽である。それはこの死である。それ故、何であれ、太陽よりこちら側にあるもの、それは全て、死によって到達されている。当のもの (火壇) を、つまり、これ (太陽：死) よりこちら側に築く者、彼は、当のものを死に到達されたものとして築いている。彼は、つまり、死へと自己をゆだねる。次に、当のもの (火壇) をこれ (太陽：死) より上方に築く者、彼は再死を克服する。知識により、つまり、この者 (祭主) のこれ (火壇) は、これより上方に築かれたものとなるのだ」。第2章においては、太陽 (死) が祭火として火壇上に設置され (→第2章3節、また注5)、馬の犠牲と共に再び太陽の姿に戻るという、*Aśvamedha* 祭の解釈が行われている。その背景にあるのは、*Agnihotra* 祭の祭式解釈に典型的に見られる、太陽と祭火との相互関係である<sup>11)</sup>。また本章5節では、「死」が世界の諸事物を創造し、それらを次々と食したことを述べ、*sā yād-yad evāśrjata tāt-tad ātum adhriyata. sārvaṃ vā atīti tād āditer adititvām.* 「彼 (死：飢え) は、創出したものの一つを食べにとりかかった。[彼が] 一切を食べる (*atti*) という、そのことが *Aditi* が *Aditi* である所以である」という語源解釈が行われる。祭火の姿を取った「死」= *Aditi* から太陽 (*ādityā* : *Aditi* の子) が生じるという文脈から見れば、本章中に、その内容と一見無関係に見える *Aditi* が現れることも無理なく理解される。

3. 「*Agnirahasya*」に見られる「死」と *puruṣa* 第2章に見られる「死」の意味するもの、また死後の天界への到達の保証の論理は、ŚBM X 巻～ŚBK XII 巻「*Agnirahasya*」の他の章と比較した際に明瞭に理解される : ŚBM X 5,2 1 *yād etān*

*māṇḍalaṃ tāpati / tān mahāduḥkhaṃ. tā ṛcaḥ. sā ṛcām lokō. 'tha yād etād arcir dīpyate tān mahāvra-*  
*tām. tāni sāmāni. sā sāmnam lokō. 'tha yā eṣā etāsmiṃ māṇḍale pūruṣaḥ sō 'gnis. tāni yājūṃṣi. sā*  
*yājuṣām lokāḥ. 「この熱を発している円輪（太陽），それは mahāduḥkha である。それは詩節達*  
*である。それは詩節達の世界である。次に，この輝いている焰，それは mahāvraṭa [サーマ*  
*ン]<sup>12)</sup> である。それは旋律達である。それは旋律達の世界である。次に，この円輪の中に存*  
*在するこのプルシャ，それはアグニ（火壇）である。それは祭詞たちである。それは祭詞*  
*達の世界である。」* 3 *sā eṣā evā mṛtyūḥ / yā eṣā etāsmiṃ māṇḍale pūruṣō. 'thaitād amṛtām yād etād*  
*arcir dīpyate. tāsmān mṛtyūr nā mṛiyate. 'mṛte hy āntās. tāsmād u nā dṛṣyate. 'mṛte hy āntāḥ. 「この*  
*円輪の中に存在するこのプルシャ，それが，他ならぬこの死である。次にこの輝いている*  
*焰，[それが] この不死である。それ故，死は死でない。不死の中に存在するから。それ故*  
*また，見られない。不死の中に存在するから。」* 6 *āthādhiyajñam. / yād etān māṇḍalaṃ tāpaty*  
*ayām sā rukmō. 'tha yād etād arcir dīpyata idām tāt puṣkaraparnām. āpo hy ètā. āpāḥ pu-*  
*skaraparnām. ātha yā eṣā etāsmiṃ māṇḍale pūruṣō 'yām evā sā yō 'yām hiraṇmāyāḥ pūruṣas. tād etād*  
*evaitāt trayāṃ saṃskṛtyehōpadhatte. tād yajñasyaivānu saṃsthām ūrdhvam ūtkrāmāti. tād etām āpyeti*  
*yā eṣā tāpati. tāsmād agniṃ nādrīyeta pārihantum. amūtra hy èṣā tadā bhavaty u evādhiyajñam. 「次*  
*に祭式に関して，この熱を発している円輪（＝太陽），それは（黄金の）円盤（rukmā-）で*  
*ある。次に，この輝いている焰，それはこの蓮の葉である。これは水達だからである。蓮*  
*の葉は水達である。次に，この円輪（太陽）の中に存在する，このプルシャなるものは，*  
*この黄金製のプルシャ（人形）であるものに他ならない。それ故，まさにこのことによっ*  
*て，この三つ組を（正しく）構成してから，ここ（火壇を築く場所）に（自身のものとし*  
*て）置き添える。それ（三つ組）は，他ならぬ祭式の完了の後，上方へと出て行く。それ*  
*（三つ組）は，この熱を発しているもの（太陽），これへと入り行く。それ故，火壇（agni-）*  
*を破壊することを気にするべきではない。あそこ（太陽）の中に，その時，彼（祭主）は*  
*生じるからである。まさしく以上が，また，祭式に関してである。」* 23 *sā eṣā evā mṛtyūḥ / yā*  
*eṣā etāsmiṃ māṇḍale pūruṣō yās cāyām dakṣiṇē 'kṣān pūruṣaḥ. sā eṣā evamñvidā ātmā bhvati. sā*  
*yadāivamñvid asmāl lokāt prāity āthaitām evātmānam abhisāmbhavati. sō 'mṛto bhavati. mṛtyūr hy*  
*āsyātmā bhāvati. 「この円輪の中に存在する，このプルシャ，そして [すなわち] 右目の中に*  
*存在するこのプルシャ，それが，まさにこの死である。そういうこれが，この様を知っ*  
*ている人のアートマンとなる。そこで，この様を知っている人が，この世界を去るやいなや，*  
*すると，他ならぬ当のこのアートマンへと至り生じる（再生する）。彼は不死となる。死が*  
*彼のアートマンとなるから」。 Agnicayana 祭では火壇の構築に先立ち，その下に，蓮*  
*の葉と，祭主が潔斎の間身に付けていた黄金（または銀製）の円盤を敷き重ね，そ*

の上に黄金の人形 (*puruṣa-*) を置く。ここでは、これら三つをそれぞれ、太陽ないし人間の眼の、各部分と等置することにより、天の太陽と地上の人間とが祭式を通じて結び付けられている。「死が彼のアートマンとなる」というのは、予め Agnicayana 祭により太陽へと、体内のプルシャと等置される黄金のプルシャを送っておくことにより、死後それを来世のアートマンとして再生することを指す<sup>13)</sup>。

4. Agnicayana 祭中の一献供とその解釈 第2章にみられる祭式解釈は、先行するブラーフマナ文献に見られる、Agnicayana 祭中の一献供<sup>14)</sup> についての解釈を踏まえ発展させたものである：(マントラ) VS XVIII 50 = TS V 7,5,2<sup>m</sup> ~ KS XL 13:148,14-15<sup>m</sup> *svār nā gharmāḥ svāhā. svār nārkaḥ svāhā. svār nā śukrāḥ svāhā. svār nā jyōtiḥ svāhā. svār nā sūryaḥ svāhā.* 「[祭火の] 熱は太陽光の如し、スヴァーハー。[祭火の] arka (輝き) は太陽光の如し、スヴァーハー。白い輝きは太陽光の如し、スヴァーハー。光は太陽光の如し、スヴァーハー。太陽は太陽光の如し、スヴァーハー」；(解釈) TS V 7,5,2 - 3<sup>p</sup> *arkó vā eṣā yád agnir. asāv ādityāḥ //2// asvamedhó. yád etā āhutir juhóty arkāśvamedhāyor evā jyōtīmṣi sāmādhātī. eṣā ha tvā arkāśvamedhī yāsaitād agnau kriyāte.* 「祭火 (agni) であれば、この arka (火壇) なのだ。あの太陽が *asvamedha* である。もし、これらの諸献供を献供するならば、arka と *asvamedha* の光達を結合することになる。その人の agni (火壇) において、つまり、このことが為されるならば、この者は arka と *asvamedha* を持つ者となる」。ŚBM IX 4,2,18 *āthār-kāśvamedhāyoḥ sāmātīr juhōti. / ayām vā 'gnir arkò. 'sāv ādityò 'svamedhās. tāu sṛṣṭāu nānaivāstām. tāu devā etābhir āhutibhiḥ sāmātanvant sāmādhātus. tāthaivāināv ayām etād etābhir āhutibhiḥ sāmātanoti sāmādhātī.* 「次に〈arka と *asvamedha* の継続〉[という諸献供] を献供する。この祭火 (agni) が arka (火壇) なのだ。あの太陽が *asvamedha* である。その両者は、創出されて、全く別々に存在していた。その両者を神々は、これらの諸献供によって継続した、(つまり) 結合した。同様に、当の両者をこの者 (祭主) は、この際、これらの諸献供によって継続する、(つまり) 結合することになる」。注意すべきは、上に見られる献供に基づく祭火と太陽との光、あるいは祭火と太陽それ自体の結合ないし継続という考えが、第2章では「再び一つの神格として生じる」として、祭火が太陽へ転換するという形に深化している点である。つまり、祭火と太陽とを別々のものとみなすのではなく、両者を本質的に同一のものとする思想に立つ解釈の発展が見られる。ここには Agnihotra 祭を巡る祭式解釈の援用が推測される。

5. 結語 1) BĀUK I 1-2 は、その語彙及び論理の点から、本来「Agnirahasya」に含まれていたものであり、K 派はこれら二つの章を取り込む形で自派のウパニシャッドを編纂したものと考えられる。2) 第1章は、それ自体は *Asvamedha* 祭

の馬を主題としており、Agnicayana 祭を扱う「Agnirahasya」に入れられている意義は直接的には見出しがたい。本章は、馬と太陽の等置によって第2章の祭式解釈の導入となっているものと解される。3) 第2章に見られる祭式解釈は、先行するブラーフマナにおける Agnicayana 祭の一献供に対する解釈を継承・発展させ、当時の思想史上の課題であった「不死」の獲得を根拠付けたものである。

1) 馬を太陽と等置し、あるいはその象徴として見ることは、Rgveda (e.g. I 163) 以来見られる。2) 並行関係の指摘は、例えば KEITH TS 英訳中の当該箇所訳注、また OERTEL Syntax of Cases 140 など。3) *yó vā áśvasya médhyasya śīro véda śīrṣaṇvān médhyo bhavati.*

4) Aśvamedha 祭には、火壇構築 (Agnicayana) が組み込まれている、cf. DUMONT L' Aśvamedha 54. 5) 「死」が自身の三分の一ずつを太陽、風となした後、自らは祭火として火壇 (水: *arká-*) の上に留まったことを言う。その際、祭火としての「死」に、馬の姿が想定されている。6) *arká-* と *aśvamedhá-* とを受ける代名詞が、述語名詞 (*devātā-*) の性・数に一致し、女性・単数で現れている。7) “water” (M. MÜLLER), “eine bestimmte Ceremonie” (BÖHTLINGK), “the mysterious name of the sacred fire” (EGGELING), “Strahl” (DEUSSEN) “le nom mystique du feu sacré dans l’agnicayana” (DUMONT), “recitation” (OLIVELLE) など。8) *arká-* の語義とその変遷については、拙稿「*arká-* の語義について—Veda 文献を中心として—」『仏教学』43 (41) - (64) 2001 「Rg-Veda における *arká-* の語義について」『印仏研』50-2 (64) - (67) 2002 を参照のこと。9) M. MÜLLER, EGGELING, DEUSSEN, DUMONT, OLIVELLE など。なお Śaṃkara も「死」を Prajāpati として注釈する。

10) *aśvamedhá-* は、祭式名と同時に犠牲とされる馬を意味する、cf. *agnihotrā-* 「晩、朝の熟した牛乳の献供」；「献供に用いられる牛乳」。11) Agnihotra 祭は、夜の間祭火の中に太陽を保持し、朝再びそこから太陽を昇らせることを目的とする、cf. BODEWITZ The Daily Evening and Morning Offering 1-3. 12) mahaduktha, mahāvratā は、Mahāvratā (一年間続く Gavāmayana の中間点である夏至祭) において用いられる śastra と sāmān の名称である。13) Agnicayana 祭で用いられる黄金の *puruṣa* を、来世のアートマンとみなす考えについては、cf. 後藤敏文「Śaṇḍilya の教説再考—Brāhmaṇa と Upaniṣad との間—」『インド思想と仏教文化』(89)-(105) 1996, do. “Zur Lehre Śaṇḍilyas — Zwischen Brāhmaṇa und Upaniṣad” Gs. RENOU 71-89 1996 [1997]. 14) この献供 (*arkāśvamedhāyoh śāmtati-* 「arka と aśvamedha の継続」) は、火壇完成後の一連の献供の中の一つとして行われる。

〈キーワード〉 Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad, Agnirahasya, Agnicayana, Aśvamedha, ヴェーダ

(東北大学大学院 専門研究員、文博)

57. On the First Two Chapters of the *Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad*: ŚB-Mādhy. X6,4-5~BĀU-Kāṇva I 1-2

Yoshiteru HAYASHI

The first two chapters of the Kāṇva-recession of the *Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad* Volume I are, in the Mādhyandina-school, included not in the Upaniṣad portion (Volume XIV) of the *Śatapatha-Brāhmaṇa* but in Volume X of the text, i.e. “Agnirahasya (mysterious doctrine of the Agnicayana)”. In this article I point out that these chapters originally belonged to the Agnirahasya, showing that the wording and the logical construction are common to that of the Agnirahasya.

The main theme of these chapters is the overcoming of re-dying (*pu-narmṛtyú-*) through the Aśvamedha, and this is theologically explained with the interpretation of the relation between the Agnicayana, which is included in the Aśvamedha, and the horse sacrifice (*aśvamedhá-*).

These chapters can be understood only in a ritualistic and theological context, and so these points are especially discussed: 1) *arká-* denotes the fire altar of the Agnicayana. 2) “Death (*mṛtyú-*)” symbolizes not Prajāpati as has so far been supposed, but the sun and at the same time the golden Puruṣa (a figure) used in the Agnicayana. 3) This theological interpretation is based on and developed from the Brāhmaṇa interpretation of an oblation (*arkāśvamedháyoḥ sāmtati-*) which is performed in the Agnicayana.

58. OIA. *ádbhuta-*, *ádabdha-*, YAv. *abda-*, *dapta-*, and OIA. *addhā*, OAv. OPers. *azdā*

Toshifumi GOTŌ

Old-Indo-Aryan *ádbhuta-* ‘mysterious, miraculous, wonderful, marvelous’ is a common adjective since the Ṛgveda. The word is, undoubtedly, derived from a negated verbal adjective of the root *dabh* ‘to deceive’, as already shown by K. Hoffmann. Another verbal adjective form is found in *á-dab-dha-* ‘not (to be) deceived’. The Proto-Indo-Iranian form is supposed to have